

日本語版はしがき

本書の日本語版の序文を執筆できるのは、私にとっても悦ばしいことです。本書が日本語に翻訳されることを嬉しく光榮に思いますし、本書の内容と議論が、新しい読者に共感していただけることを願っています。本書は一九四五年以降のイギリスという個別の歴史に基いていますが、私はこの地域の歴史を、セクシュアリティと親密生活に対する態度の大転換を示す事例だと考えています。その転換は過去二〜三代代にわたってグローバルなインパクトを与えてきました。

それぞれの国には固有の歴史と伝統があり、変化のリズムはその地域の条件に依存します。変化は不均等で、多くの変化に対して激しい抵抗もありました。私が論じたいのは、私たちが長期的・永続的な革命のまっただ中にいるということ。そのことの意義は世界中の多数の地域において、現在進行形で問われています。もともとこの革命はグローバルな現象ですので、世界のあらゆる地域が最終的にはこうした性の変容から逃れることはできません。もしかしたら変化のペースはグローバル化とデジタル革命によつて加速しているかもしれませんが、私が本書で探求したのは、日常生活におけるこの革命の主たる要素を説明することです。

本書は、一九五〇年代以降、親密生活に「大転換」が生じたというアイデアの下に展開していきます。その中心にあつたのは伝統的な生活様式の崩壊でした。つまり家族、宗教、厳格な性のヒエラルキー、適切な性行動の要素となるのは主として一夫一婦制・異性愛・生殖に関連したセクシュアリティであるという偏狭な観念を基盤に作られていた生活様式が崩壊したのです。性的／親密な生活はますます一連の分離に基づくようになっていきます。それは第一に、産児制限が容易に利用できるようになった結果としてのセクシュアリティと生殖の分離であり、第二に、婚前セックスや婚姻を伴わない同居（同居）の増加、離婚の手軽さ、ひとり親の増加に伴うセクシュアリティと結婚の分離であり、第三に、同性間の関

係に対する開放性が増大し、レズビアン、ゲイ、バイセクシユアルの市民権と平等を求める運動が発展した結果としてのセックスと異性愛の分離であり、第四に、同性間のつながりと同性婚の承認を求める国際的運動に伴う異性愛と結婚の分離であり、第五に同性婚に伴う異性愛と子育ての分離であり、第六に、トランスジェンダーの国際的運動の出現や、ジェンダーは生物学的男性／女性という絶対的二分法ではなく潜在的に変化しうる流動的なものだという認識が深まった結果としての、身体 of セックスとジェンダー・アイデンティティの分離です。視野を拡げてみると、性行動に対して厳格だったかつての社会統制が弛緩し、性表現情報、とりわけポルノグラフィについて議論したり展示するよりリベラルな法律と大きな自由が認められるようになったことがわかります。人類史の中で、セクシユアリティが現在ほど語られ、論じられ、議論的になり、ディスプレイされ、商品化された時代は存在しませんでした。もちろんイギリスでも世界的にみても、これらの変化に反対がなかったわけではありません。一九八〇年代の AIDS 危機に際して、躊躇とまどいがちで恐怖に取り憑かれた反応がありましたし、それは八〇年代までに生じた変化が終わりのない性格をもつことを典型的に示しています。また世界規模での保守的な原理主義運動は現在でも、伝統的なジェンダーのパターンと性行動の中心性を主張しています。彼らは世界の多くの地域で権力をもち、偏狭な政治目的のために女性嫌悪・同性愛嫌悪・トランスジェンダー嫌悪を巧妙に利用しています。このように今日でも、セクシユアリティに対しては強烈な抵抗があります。しかし本書の中心的な論点を否定することはできないでしょう。つまり、史上はじめて何百万人ものが、個人的かつ集合的に、自分たち自身の性生活と個人生活を作り、そして作り変えるアクティヴな主体になっているということです。私たちは、われわれ自身が勝ち得し性の世界に生きています。

本書が有する射程は幅広いもので、私たちが変化の最終地点にいると考える理由はどこにもありません。インターネットが性交渉や求愛、恋愛、商業や政治のあり方を刷新したことを観察するだけでも、未来が計算不能だということがわかるはずですが、本書の最初の英語版を執筆し始めてからまだ一〇年にもなりません。それで降の変化も劇的でした。最も明らかなこととして、同性婚のあり方が変わりました。ここ一〇年の間に、南アフリカ、アルゼンチン、アイスランド、デンマーク、スウェーデン、ベルギー、オランダ、フランス、イギリスという、それぞれ事情が異なる国々でも、同性婚

の制度が採用されました。二〇一五年には、同性婚にもっとも抵抗を示した二ヶ国、つまりアメリカ合衆国とアイルランドでも、同性婚が合法化されました。アメリカでは最高裁判所の判決が出ましたし、アイルランドでは国民投票で可決されたのです。歴史的な観点からみれば、これらの変化は特筆に値するといえるでしょう。一〇年前でもこれはいささか想像し難かった事態です。イギリスに話を戻しますと、セクシュアリティの歴史に長い間興味を持ってきた社会学者かつ歴史学者として、私は、自分が生きているうちにこれほど多くの変化が生じたことに驚愕の念を禁じ得ません。なんといっても一九五〇年代のイギリスは、世界で最も保守的な国の一つとして有名だったわけですから。今日ではイギリスは、最もリベラルでリラククスできる国の一つです。セクシュアリティには歴史があり、性の歴史は政治史や社会史や経済史に勝るとも劣らぬほどドラマティックで意義深いものです。

日本の読者が本書の中に、日本と全くパラレルな性の歴史を見出すかどうかはわかりません。しかし私は心から信じています。他の文化や伝統や歴史を学ぶことを通して、私たちは自分たち自身についても多くを学ぶことができます。それをよりとを。比較史は自分たちの歴史の個性にも強い光を当てて、差異を超えた対話に貢献することができます。それはより複雑化しつつある世界にあつては本質的に重要なことです。私が本書の日本語版を通して歓迎したいのは、そのような精神です。

最後に、本書を日本語に翻訳するにあたり、赤川学氏と大学院生諸氏にはたいへんお世話になりました。改めて深く感謝申し上げます。彼らのおかげで、本書を日本の新しい読者のもとにお届けすることが出来て、嬉しく思っています。

二〇一五年九月

ジェフリー・ウィークス

序文

本書は現在についての本であり、私たちが現在をどう生きているかを示す書でもある。が、本書は同時に、性愛（erotic）と親密性（intimate）に関する私たちの生き方の、一九四五年以降の大転換に関するストーリーでもある。現在を理解しなければ未来を捉えるにあたり障害になる。歴史感覚がなければ、そして、その頃私たちがどのように生きていたのかを理解することなしに、何がどう変わったのかを測る基準をもつことはできないし、われら勝ち得しこの世界で過去六〇年間に起きた劇的な変化の重要性を把握することもできない。

すでにお気づきだろうが、本書のタイトルはピーター・ラスレットの有名な二冊『われら失いし世界』（1963 = 1966）をもじったものだ。ラスレットのこの本は、一九六〇年代以降、イギリスの個人主義と家族生活の歴史についての私たちの認識を革新するのに貢献した。一方で「われら失いし世界」というフレーズは、この言葉に特定の学問的な意味を込めた著者の意図を越えて、別の共鳴者を見出した。すなわちこのフレーズは、私たちが現在暮らしている文化より安定し、秩序だっていたとされる道徳文化に対する懐古を呼び起こしてしまったのだ。かつての伝統、権威、性に対する節度、家族内にあつた規律、隣人との助け合い、紳士的なふるまい——そこでは若気の至りというべきふるまいは善良な地元警官によって簡単に差し止められた——は、明らかに非道徳的な不確実性や、さらには（人の好みや道徳に対する危機意識によって言い方は変わるが）現代の混沌と対置されるようになった。現代では家族は分裂し、結婚制度は致命的なまでに衰退し、若者は多かれ少なかれ手がつけられなくなり、性的には「何でもあり」となって倒錯行為が普通になり、「敬意」はほとんど消え失せた、というわけである。このような道徳保守主義的な批判は、今日では（少数の）マイノリティの声なのかもしれない。しかしこうしたニュアンスを含んだ発言は自称進歩派、特にコミュニタリアンの中でも社会関係資本の衰えを嘆く

人々から聞こえてくる。このような批判を行う政治的保守主義から距離を置いているはずの急進派の指導的な学者、たとえばジグムント・バウマン (Bauman 2003) でさえ「リキッドな生」、「リキッドな愛」、「暗闇時代」の危険と脅威について論じている。このような言葉遣いは、たとえばメラニー・フィリップス (Phillips 1999) やクリスティ・デイヴィス (Davies 2006) のような保守論客の嘆きから理論的には遠く離れているとしても、似たような文化悲観論を生み出してしまうのである。

そうした根深い悲観論や絶望には抵抗したい。私たちの日常生活と急速にグローバル化するこの世界をすっかり変えてしまいつつある性愛と親密性の変化について、私は楽観的というわけではないが、現実的で前向きな評価を下したい。第一章で議論するように、私たちは長く、未完ながらも抜本的な革命の途上を生きているのだ。この革命はこれまで、多様な性を生きる可能性や、親密な生活が創造される可能性を大きく変化させてきた。本書は約三〇年間に及ぶ調査と著作に基づいて、性的、親密、家族である (Familial) あり方がいかに変化したかのバランスシートを提供する。本書を執筆するにあたって私の立場はC・W・ミルズ (C. Wright Mills) と同じである。「私は、客観的であろうとつとめたが、自分が不偏であるというつもりはない¹」。したがって私の問題関心についてはつきり述べておくべきだろう。この永続的な革命は、西側諸国の大多数の人々や、生活が劇的に変化した南半球の人々にとっても多大な利益をもたらしたと私は確信している。さらにこうも言おう。大きな問題が残っていることはたしかだ——恐怖、不安、偏見、権力の濫用、特権的で差別・搾取する権力、欲望の刺激、未だ満たされない希望など。概ね二歩進んで一歩戻るようなペースに感じられる。しかしその推進力はポジティブなものであり、その勢いの源の大部分はこの新しい世界の本質的な特徴、つまり草の根的な行為主体 (agency) が私たちの移行しつつある世界の中心になっているところにある。現代の世界はますます、私たちが私たちのために作る世界となりつつあり、それは日常生活の民主化という長期的なプロセスの一部でもある。現

代の社会的、文化的、道徳的な革命は基本的に下からの革命であり、その革命が将来もたらす果実は、私たちの掌中で途方もなく大きく実っているのである。このことを理解しないかぎり、私たちは先に述べた問題点や不安を理解することができないだけでなく、私たちが作り変えている世界に待ち受けている課題やチャンスも理解できないのである。

本書は現代——それをどう呼ぶかは人によるが、「ポストモダン」、「後期近代 (late modern)」、「再帰的 (reflexive)」、「物語」や「リスク」に満ちた時代と見なされているものことである——世界の親密性とエロティシズムに関する現時点の議論を、広汎な理論と私自身の長年の経験的調査とに基づきながら探究している。本書は一九四五年以降の複雑な経路のうち特に重要と思われる時期を分析する。一九四五年は象徴的な意味で本書のスタート地点としてふさわしい。というのもその年、セクシュアリティと個人の生に対する態度を変化させるのに多大な貢献を果たした福祉世界が色々な意味で誕生したからだ。この年、現代世界の屋台骨を担ったベビーカー・ブーマーが大量に産まれた。そして偶然にも私の産まれた年でもある。だから本書は一九七〇年代から私が行ってきた性愛と親密性に関する幅広い研究の成果というだけでなく、私自身の人生、そして私自身が経験してきたことを本書の物語にフィードバックさせる考古学という意味も持っている。

第一章の「異なる世界」は、つながりに関する章である。つながり^{コネクト}の存在のある人生は思慮深く、そして再帰的な人生でもある。つまり私たちは自分が何者で、どこから来て、どこへ行くのかという自意識の高まりとともに人生を生きている。本章で私が議論するのは、私たちが生きるこの世界の際だった特徴は、この世界がますます人々の積極的な挑戦によって形作られるようになりつつあるということだ。現代の性愛革命の大半はこうした草の根

1 Mills, C. Wright, 1982, *The Marxists*, New York: Dell Publishing. (= [1964] 1971 陸井四郎訳「マルクス主義者たち」青木書店) の冒頭一〇ページからの引用。同書の謝辞にも登場するマルクス主義研究者のラルフ・ミリバンド (Ralph Miliband) の助言もあり、ミルズの墓の碑文として記されている一節でもある。

的な変容の結果なのだ——文字通り、私たちがともに世界を作り上げたのだ。というのもつながりのある人生は同時に互恵的な人生でもあるからだ。共にそのように生きる「他者」との、単に拘束されているだけではない絆のあるつながりによって私たちは私たちになり、私たちは人間になるのである。つながりのある人生とはグローバルとローカルを接続し、隔たりをつなぐ架け橋となり、性愛に関する問いを権利と責任の問題、そして社会正義と結びつける。現在から一九四五年へと時を遡ることで、本書は過去と現在のつながりを示すだけでなく、この新世界で私たちがどう生きているかを理解することの重要性と歴史に正面から向き合う必要性を提示する。

第二章は「抑制 (restraint) の文化」である。この章では一九四〇～五〇年代に着目する。この時代は性に対する抑制の文化が支配的であり、その文化によって形作られた時代であった。破滅的な戦争が終結し、抜本的な社会変動を希求しつつ、人々は新世界の訪れる兆しを実現しようともがいていた。本章の中心は、私の出生地でもある南ウエールズのロンダ峽谷で行った一つの事例研究である。この峽谷は外見の上では労働者階級文化一色の地であり、特定のジェンダー観に基づいた、極めて規制の厳しい性行動のパターンを有していたが、未来につながるプラグマティックな道徳が存在していた痕跡がある。次にこの章では、安心感と豊かさが増しているという感覚が強まったあと、イギリス全土の家族・性生活が広く平均化したことについて掘り下げる。戦間期の出生パターンの変化が原因で大家族の必要性が叫ばれた。その意見には政治的・道徳的な非難の声が上がっていたが、戦後ベビーブームが勢いを増すにつれ、(大家族の必要性が叫ばれることもなくなったため、それに対する非難の声も同時に) 不必要なものになっていった。結婚における性的快楽の重要性が新たに強調されるようになり、限定された範囲ではあったが、女性性はセクシュアル化 (sexualize) された。しかしこれらを経て一九五〇年代に起きたパラドクスは、人々の態度が自由化したことではなく、逆に狭量な家族観と異性愛観が強化されたことであった。特に男性同性愛が社会的介入の標的にされた。そして一九世紀から受け継がれてきた古き「クイア・ワールド

(queer world)」が消失し始めたのである。「尊敬に値する (respectable) 同性愛」という新しい公共的な主観的意識が、社会生活と政治的言説の場に現れた。さらに重要なことに、ベビー・ブーマーがこの時代——のちに保守派の人々が社会関係資本とコミュニティ、そして家族の安定の黄金時代と懐古することになるこの時代——の脆弱さを示す不安の種と思われはじめたのである。

第三章・第四章は「大転換」に関わる章である。この二章にわたって私は、一九六〇年代から一九九〇年代までの期間を転換期の延長と捉えるのが最善だと論じる。一九六〇年代の「性革命」にはしかるべき注目をする。特にこの時代は「ピル」等の避妊方法全般が改善したことを受けて、女性が自分のセクシュアリティを表現し、セクシュアリティと生殖の関連を断ち切る新しいチャンスも生まれたのである。しかしそれは同時に保守派の強い嫌悪の対象となり、フクヤマ (Fukuyama 1999 = 2000)² が「大崩壊」と呼ぶ出来事の明白な原因にもなった。とはいえ一九六〇年代に生じた変化は、複雑で広範囲な変容の一側面と捉えることができる。この二章で、私は鍵となる四つの変化の重要性を議論する。第一に、個人が有する関係性の民主化とインフォーマル化である。そこではセックスと生殖、性関係と婚姻関係、結婚と子育ての間に生じた深い断絶が進行したのである。第二に、特に女性、より顕著にはレズビアン & ゲイの間で、性的主体性 (sexual agency) に対する自覚が非常に強まったことである。女性解放運動とゲイ解放運動はその傾向を最も劇的に示すできごとだった。これら解放運動の影響は、ときに反撃に晒されたが、二〇〇〇年代まで残り続けている。第三に、公私の境界に重要な変化があった。この現象は、一九六〇年代のいくつかの「寛容な」法改正のうちに観察することができる。他にもフェミニストによる暴力とポルノグラフィへの介入や、子どもについての新たな不安や、サッチャー政権時代の道德

2 フランシス・フクヤマの著書名にも用いられた用語。本書で「大崩壊」したとされているのは「二〇世紀半ばの工業化時代において当たり前とされていた社会的価値観」(Fukuyama 1999 = 2000a: 15)のことである。

保守主義の中にも見出すことができる（一貫していたわけではなかったが）。最後に、一九八〇年代初頭に起きたHIV/AIDS危機によって高まった「リスク」感覚が誇張されるようになったことである。この出来事によって、当時変化しつつあった不確実な規範に鋭いスポットライトが当てられた。いくつかの劇的な事件が起きた。しかし経済の再編成と新しい猛烈な消費（至上）主義の誕生のさなかにあつて、底流を流れる傾向は一貫したストーリーであつたと私は主張する。そのストーリーとは自由化、世俗化、そして主体性の拡大である。

第五・六章は、現代に立ち戻ってくる。現代の世界は性の多様性という亡霊に怯えずぎだと私は主張したい。

この背景には劇的な社会変化と、何がセクシュアリティを構成するかに関する認識の変化という二つの変化に促されて、性生活の意味が変化しつつあるという自覚がある。ここでは性的なことに関する意味づけや、性的アイデンティティ、性的実践のあり方は文化的構成物であり、文化によって異なることが強調される。セクシュアリティそれ自体には正解も不正解もないのである。「エロティックなもの」を理解したいのであれば、私たちはそれを形成している複雑な社会の力を紐解いていかなければならない。第五章では、多様性の三つの側面について掘り下げる。ライフスタイルの多様性、民族・人種・信仰の多様性、そしてライフコースの多様性である。そしてこれらの多様性が私たちの性愛生活にどのような影響を与えているのかをみる。ここでの分析を、新しい個人主義に対する様々な批評の分析へとつなげ、そこからさらに新自由主義の危険と接続しようとしてみる。第六章では、現代のセクシュアリティに潜むいくつかの「矛盾」について掘り下げる。この矛盾によって、不確かで不安な感覚が生み出されているのだ。ここで取り上げる矛盾とは、①「選択に基づく関係（*choice relationship*）」、②男らしさと女らしさという言葉の意味変化、③トランスジェンダー運動が公に登場したことに代表される、ジェンダー秩序に対する複雑な異議申し立て、④新しい主体性と異性愛が規範であるという

前提 (heteronormativity、異性愛規範性) の制度化、⑤世代間のコンフリクト、⑥いわゆる「テクノロジーによる解決」、⑦そして、①～⑥のすべてが、性にまつわる価値と権威に対して突きつける課題のことである。伝統的な価値体系が弱体化したことで、権威が並立するようになり、性に関する人々の声と物語が激増するようになった。多様性を様々な意味で、それだけで素晴らしいものとして賞賛してみたい気持ちも確かにある。しかし互いに寛容な社会が発展する以前の段階として同性愛嫌悪、レイシズム、信仰やそれに似たものをめぐるコンフリクト、さらにジェンダーにまつわるコンフリクトの扱いにくさという課題が立ちふさがっている。他方、性に関する世界を作り変えた大変化によって、新しい形の親密市民権 (intimate citizenship) が生み出される必要性和可能性が切り開かれたのである。

これに続いて第七章では結婚、家族生活、友人関係およびこの三つを支える規範、価値、コミットメント「訳注：commitment、責任ある関与や愛着、その決意」の最新の議論と実際の変化について取り扱う。ここで議論するのは個人の自律の尊重、道徳的選択権の個人化が現代社会に特有の特徴であると同時に、それは日常生活の中で実現している互恵と相互ケアの価値と密接に結びついているということだ。私は「社会関係資本」が不足していると主張する当世風の理論に異論を唱える。逆に、日常生活には顕著で（潜在的に）破壊的な変化が起きた

3 異性愛規範性は Warner (1993) の用語。異性愛を人間関係の自然の形であり、ジェンダー観の唯一のモデルであり、すべてのコミュニティにとって不可欠な基盤であり、それ抜きでは社会を維持することのできない再生産の手段として理解すること。ヘテロセクシズム (heterosexism) 批判が自ら「異性愛／同性愛」の二項対立に陥ったことへの批判的検討から生み出された。このとき「規範」あるいは自然とされる異性愛の形はコミュニティによって多様であるため、異性愛規範性を有するコミュニティでは同性愛をはじめとするセクシュアル・マイノリティだけではなく、「不自然な異性愛」も規範から外れた存在として周縁化されることある。

参考： <http://digitalcommons.law.rnsu.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1211&context=taqpubs>.

<http://queeringme.g.hatenablog.jp/R/y07A/20090429/p1>.

<http://www.innovateusnet/innopedia/what-heteronormative>